

<ラウンドテーブル報告4>

ベネッセ大学生調査から捉える現代初年次学生の特徴

—受験勉強スタイル、学習態度、学習成果の観点から—

【企画者】山田剛史（島根大学）・杉谷祐美子（青山学院大学）

【司会者】山田剛史（島根大学）・山田礼子（同志社大学）

【調査の趣旨説明】樋口 健（ベネッセ教育研究開発センター）

【報告者1】望月由起（横浜国立大学 現：お茶の水女子大学）

【報告者2】杉谷祐美子（青山学院大学）

【報告者3】山田剛史（島根大学）

【コメンテーター】山田礼子（同志社大学）

1. 企画趣旨

2008年10月、ベネッセ教育研究開発センターは、「大学生を取り巻く社会状況や教育環境が変化するなかで、大学生の学習・生活全般にわたる意識や実態をとらえること」を目的として、全国の大学生4,070名を対象に「大学生の学習・生活実態調査」を実施し、翌3月に報告書を刊行した（Benesse教育研究開発センター、2009）。今回の企画者および報告者は、研究委員として当調査の構成から分析・執筆を担当した。

近年、様々な全国規模の調査が実施されるようになってきているが、その背景・意図として大学進学率の増加に伴う多様化の実態を捉えることや、それを通じて教育実践における様々な課題解決の方法を探求・提示することなどが挙げられる。とはいえ、こうしたマクロ調査のみで直接的な解決方法を導くことは困難であり、日常の教育・学修支援を相対化する一つの手段として有効活用されることを期待している。

そこで、本ラウンドテーブルでは、現代における初年次学生の特徴を捉えるべく3名の話者提供から、「大学受験勉強スタイルと入学後の学習態度との関連（望月）」「高校での学習態度と大学での学習態度および学習経験との関連（杉谷）」「学習成果に影響を及ぼす要因

の検討（山田）」といったテーマでそれぞれ報告を行った。（山田剛史）

2. 調査の概要

《対象者》留学生・社会人経験者を除く18～24歳の大学1～4年生4,070名（内訳：1年生1,017名、2年生1,013名、3年生1,017名、4年生1,023名／男子2,439名、女子1,631名）。

《抽出方法》約80万人のモニター母集団より、文部科学省『平成20年度学校基本調査（速報）』の男女比・学部系統別の比率を参考に、無作為に抽出（インターネット調査）。

《主な調査内容》高校での学習実態／大学選択で重視した点／大学への志望度／大学の満足度／大学生活で力を入れてきた活動／授業への出席率／大学での学習状況／大学生活を通じて身につけたこと（大学での学習成果）など。（樋口 健）

3. 大学受験勉強スタイルと入学後の学習態度との関連

大学受験競争の過熱解消や受験生の負担軽減等を目的とし、大学入試改革は長年にわたり議論されてきた。近年の大学入試政策では、選抜方法や評価尺度の多元化が積極的に推進され、AO入試をはじめとした特別選抜入試を実施する大学が著しく増加している。

こうした状況に伴い、「受験勉強＝教科学習」という、従来一般的であった大学受験勉

強スタイルにも揺らぎがみられ、多様化しているものと思われる。大学生の学力低下の一因として、「大学に入学するための選抜競争の緩和」が多々指摘されるが、受験勉強スタイルの多様化は、大学生の学力水準の問題のみならず、入学後の学習態度にもかかわる問題ではなかろうか。

上記の問題関心にに基づき、本報告では、現代の大学生の受験勉強スタイルについて実証的に示すとともに、大学入学後の学習態度との関連についての分析・検討を行った。

その結果、受験勉強スタイルの多様化は、調査対象とした学年間においても明確に示された。「志望理由書・自己推薦書の作成」「面接の準備」に取り組んだ学生は年々増加しており、1年生と4年生では明らかな有意差もみられた。また、彼らは「推薦入試」「AO入試」といった非学力選抜型の入試により、大学に入学している傾向も確認された。

非学力選抜型入試の拡がり、大学生の学力低下の一因として多々指摘されている。学力と学習態度には、少なからず相関があるものと思われるが、本調査からは、非学力選抜型の入試に対応するような受験勉強スタイルで大学に入学した初年次学生の学習態度には、さしたる問題点はみられなかった。むしろ、彼らの性別や大学入学時の偏差値レベルなどにより、その高さに有意差のある学習態度もみられたとはいえ、彼らの入学後の学習態度は、同学年全体の平均値より高い側面が多く、とりわけ、授業に対する基本姿勢の高さが目立つ結果が示された。(望月由起)

4. 高校での学習態度と大学での学習態度および学習経験との関連

本報告では、初年次学生が大学生にふさわしい能動的な学習態度を身につけるにあたって、課題を探るため、第1に高校から大学への学習態度の変化を、第2に大学での学習態度と高校での学習態度との関連を、第3に学習態度と学習経験との関連を検討した。

第1に、高校時代と現在の学習態度について、内容的に近い設問の回答を比較した。「ノートテイキング」、「課題提出」、「授業の復習」などの基本的な学習習慣は高校時代の平均値より上回ったのに対して、「教員への質問」、「わからないことを自分で調べる」などの積極性・自発性の面では低下、もしくはほぼ変わらぬ結果となった。学年間で大きな差はみられないものの、初年次生は授業の予習・復習に関して、2年次生以上はノートテイキングや継続的な勉強において、高校から大学にかけての伸びがやや目立つ傾向にあった。

第2に、現在の学習への取組24項目について因子分析を行い、「ディスカッション等への貢献」、「受講の基本的マナーの遵守」、「興味に基づいた自主学習」、「計画的・継続的自主学習」、「授業の予習・復習」の5つの因子を抽出した(主因子法, Promax 回転)。高校時の学習への取組の程度で高群、低群と分類し、上記の各下位尺度得点を比較した結果、「授業の予習・復習」のみ低群の平均が高群のそれを上回ったが、それ以外の4因子では、高群が低群を上回り、高校時の学習態度と大学での学習態度は関連することが明らかになった。

第3に、高校時の総合的学習の授業経験と大学の授業経験の程度によって、各下位尺度得点を算出した。「授業の予習・復習」を除く4因子で、おおむね、高校・大学の授業経験が豊富な学生のほうが少ない学生よりも高い値を示した。とくに、グループワーク、ディスカッション、プレゼンテーション等の機会を取り入れた授業経験が「ディスカッション等への貢献」、「興味に基づいた自主学習」、「計画的・継続的自主学習」などの学習態度に差をつけ、スキルの指導は実践や演習の経験を重ねてこそ有効であることが示唆された。また、そもそもの大学教育に対する選好の違いも学習態度に反映されており、授業経験のみならず、学生の大学教育観や授業観にも配慮すべきことがうかがえた。(杉谷祐美子)

5. 学習成果に影響を及ぼす要因の検討—学習経験と学生生活類型を中心に—

本報告では、初年次学生(N=1,017)における学習成果に影響を及ぼす要因について、第1に授業内での学習経験の観点、第2に大学生活経験に基づく学生類型の観点から検討を行った。

第1の点に関して、本調査では学習成果に関する項目を計28項目選出しており、予め因子分析によって4因子解(F1.全般的技能, F2. 数的処理, F3.外国語, F4.積極的態)が確認されている(山田, 2009a)が、ここでは学習成果28項目と授業経験19項目との相関係数を算出したところ、31の項目間において $r=.30(p<.001)$ 以上の相関が見られた。特徴的な結果として、(1)「ディスカッションの機会を取り入れた授業」や「グループワークなどの共同作業をする授業」といった協調学習形態が、リーダーシップや協調性、創造的思考の養成に寄与していること、(2)「実験や調査を取り入れた授業」は主に数的処理に関わる力の養成に寄与していること、(3)「自分の進路や適性について考える授業」といった所謂キャリア教育が、適性や自己肯定感を高めることに寄与していることなどが挙げられた。その他、学習成果の獲得との関連が低かった(あるいは無相関)授業形態として、補習教育やスタディ・スキル系の授業が挙げられ、また成績(自己申告)との相関も弱いことが挙げられた。

第2の点に関して、大学生生活経験へのコミットメントの程度による学習成果の差異について検討を行った。具体的には、授業、サークル、授業以外の自主勉強、アルバイト、趣味、読書の六つの活動への取組の程度に基づき類型化を行った。クラス分析により、五つの学生生活類型(CL1.全ての活動に積極的なハイパーフォーマー群48名, CL2.正課・正課外活動への積極的参加群79名, CL3.自主的学習への積極的参加群96名, CL4.全ての

活動に消極的な群155名, CL5.正課外活動への積極的参加群89名)が抽出された。これを独立変数、学習成果4因子を従属変数とした一要因分散分析の結果、全てに1%水準の有意差が見られた。多重比較(Tukey法)の結果、(1)CL1, CL2など正課・正課外活動に積極的にコミットしている学生の学習成果は高く、CL4のように、全ての活動に消極的な学生の学習成果は低いこと、(2)CL5のように、サークルや部活動、趣味など正課外活動にのみ傾倒している学生の学習成果は低いことなどが示唆された。(山田剛史)

6. コメンテーターによるコメントと討論

「学生本位の改革」を推進する上で、学生に関する教務情報と学生調査等の評価データを総合的に分析する必要がある、ベースラインサーベイとしての学生調査の重要性がある。その際、アセスメントには大別すると直接評価と間接評価があり、前者には科目試験や卒業研究・論文などが、後者には学生調査によって得られる学習行動や各種満足度などが含まれる。卒業生調査なども典型的な大学でのラーニング・アウトカムを対象とした間接評価である。アセスメントを行う際には、これらの特徴・性質を押さえておく必要がある。その上で、今回行った学生調査すなわち間接評価からどこまで把握することが出来るのかを多角的に検討していかなければならない。

望月報告では、受験勉強スタイルの変化に着目し、「志望理由書・自己推薦書の作成」や「面接の準備」に取り組んだ学生が漸次増加しており、そういった学生の授業に対する基本姿勢は高い傾向にあることが指摘された。逆に、「積極性・自主性・計画性・継続性」といった点では低い傾向にあり、こうしたことが生起する要因として受験勉強スタイル以外にどのようなものが挙げられ、また関連性を有しているのかといった点について質疑応答がなされた。

杉谷報告では、「高校から大学にかけての学

習態度の変化」や「大学における学習態度と高校における学習態度との関連性」、「大学における学習態度と高校・大学での学習経験との関連性」といった点について詳細な検討がなされた。特に、高校時代に身についた態度や志向性(input)を変化させることは可能なのか、だとすればどのような大学での授業方法があり得るのかといった点について質疑応答がなされた。

山田報告では、学習成果と学生生活の関係を、コミットメントや進学時満足度といった観点を絡めながら検討がなされた。積極的にコミットしている学生の成果は高く、逆に消極的な学生は低いという先行研究を支持する結果が得られた。学生のタイプ分類の普遍化とも言えるかもしれない。また、進学時満足度と学生生活類型との関連性についても検討がなされた。進学時に高い満足感を有している学生群は、消極的なコミットメントを呈し、結果相対的に低い学習成果へと至っている。逆に、進学時に低い満足感を有している学生群は、積極性を発揮し、高い学習成果を獲得している。興味深い結果だが、こうした学生がどのような変化の過程を経ているのかといった詳細なプロセスの解明が求められる。

最後に、分析結果からの示唆と調査の限界について指摘しておく。特に今回の調査はインターネット調査によるもので、学生と機関の特性の関係性を把握することが困難で、大学教育をどう学生に還元するのかの処方箋を描きにくいといったことが挙げられる。ただし、こうした調査を継続的に実施・蓄積していくことで、マクロな学生の分類や動向を把握すること、機関との関連性を明らかにしていくことで精緻化を図りつつ、ひいては客観的データに基づく現状評価文化を醸成することへとつなげていくことが重要であると思われる。(山田礼子)

7. 最後に

本ラウンドテーブルには 80 名近い会員が

参加された。コメンテーターからのコメントに基づく討論に加えて、フロアーからも有益な指摘を多数頂いた。「マクロな調査結果に基づくモデル化の必要性」や「学生の自己認識と実際の差異」、「満足度の質の違い」、「専門教育と教養教育、初年次教育、それぞれの位置づけ」など時間ぎりぎりまで熱心な議論がなされた。

本調査は網羅的に現代大学生の学習・生活実態を捉えるものとなっており、今回はその第一弾報告になる。今後、様々な観点から分析・報告を行っていく。

参考文献

- Benesse 教育研究開発センター編(2009)『大学生の学習・生活実態調査報告書』研究所報, 51 (http://benesse.jp/berd/center/open/report/daigaku_jittai/hon/index.html)
- 望月由起(2009a)「大学進学までの受験について」Benesse 教育研究開発センター編, 前掲書, 第1章第2節, pp.40-55.
- 望月由起(2009b)「受験勉強スタイルと大学入学後の学習への取り組みの関連に関する一考察」『日本教育学会大会研究発表要項』, 68, 266-267.
- 杉谷祐美子(2009a)「大学生の学習状況」Benesse 教育研究開発センター編, 前掲書, 第3章第1節, pp.80-99.
- 杉谷祐美子(2009b)「大学初年次生の学習態度と学習経験の影響」『コア・FYE 教育ジャーナル』, 3, 1-12.
- 杉谷祐美子(2010)「学士課程教育における初年次教育の位置づけ」『第15回FDフォーラム報告集』, 1-20-1-28.
- 山田剛史(2009a)「大学での学習成果」Benesse 教育研究開発センター編, 前掲書, 第3章第2節, pp.100-106.
- 山田剛史(2009b)「学習態度, 学習経験と学習成果—高大接続を考えるひとつの視点—」島根大学入試センター主催 高大接続フォーラム
- 山田剛史(2010)「転学を希望する学生とは誰か—『学生の多様化』を不適應学生の地平から捉える—」『第16回大学教育研究フォーラム発表論文集』, 112-113.